

忠五郎のはなし

THE STORY OF CHUGORO

小泉八雲作・田部隆次訳

登場人物

忠五郎

年寄の足軽（年寄）

医師

ナレーター

◆昔、江戸に忠五郎という足軽がいた。忠五郎が夜な夜などこかへ出掛けるのを、同僚の年寄り足軽が気にしていた。

◆ナレーター、忠五郎、年寄

昔、江戸小石川に鈴木と云う旗本があつて、屋敷は江戸川の岸、中の橋に近い所にあつた。この鈴木の家来に忠五郎と云う足軽がいた。容貌の立派な、大層愛想のいい、伶俐な若者で、同僚の受けも甚だよかつた。

忠五郎は鈴木に仕えてから数年になるが、何等非難の打ち所のない程身持もよかつた。しかし遂に外の足軽は、忠五郎が毎夜、庭から抜け出して明方少し前までいつもうちにいない事を発見した。初めは、この妙な挙動に対して誰も何にも云わなかつた。その外出のために日常の務めに故障を来す事がなかつたのと、またそれは何かの恋愛事件であるらしかつたからであつた。しかし暫らくして、彼は蒼白く衰えて来たので、同僚は何か重大な間違でも起らぬように、干渉する事にした。そこである晩忠五郎が丁度家を抜け出そうとする時、一人の年取つた侍が彼をわきへ呼んで云つた、

年寄 『忠五郎殿、御身が毎晩、出かけて、明方までうちに居られない事は、我々皆知っている。それから見たところ顔色もよくない。どうも御身は悪友と交つて健康を害しているのではないか。その行に相当の弁解ができないとこの事を役頭まで届けて出なければならぬ。何れにしても

われわれ 御身の同僚でまた友人であるから、御身がこの家の  
捉に反して夜分外出なざる理由を承るのが正当じゃ』

そう云われて忠五郎は大層当惑し、また驚愕したらしかつた。  
暫くは黙っていたが、やがて、彼は庭に出た、同僚もそのあとに  
続いて出た。二人が外の人に聞かれない所まで来たとき 忠五郎は  
止って云った。

忠五郎『もう一切申します、しかしどうか内密にしておいて下さい。  
もし私の云う事を洩されると、一大不幸が 私の身に  
ふりかかります。

忠五郎『五ヶ月程前の事です。私がこの恋のために始めて夜  
外出しましたのは、ことしの春の初めの事でした。ある晩  
私は、両親を訪れて屋敷へ帰ろうとする途中、表門から  
遠くない川岸に婦人が一人立っているのを見ました。  
みなりは上流の人のようでした。それで私はそんな  
立派な装いの婦人がこんな時刻に一人そこに立っているのが  
変だと思いました。しかし私はそんな事をその婦人に  
尋ねる理由はないと思いましたので、何も云わずに  
わきを通ろうと致しますと、その婦人は前へ出て私の袖を  
引きました。見ると大層若い綺麗な人でした。

「あの橋まで私と一緒に歩いて下さいませんか、あなたに  
申上げる事があります」と女は云いました。その声は  
大層柔かな気もちのよい声でした、それから物を云う時、  
にっこりしました。そのにっこりには勝てませんでした。  
そこで私も一緒に橋の方へ歩きました。その途中 女は

私<sup>わたし</sup>が屋敷<sup>やしき</sup>へ出入<sup>でいり</sup>するのをこれまで度々<sup>たびたび</sup>見ていて好き<sup>す</sup>になったと云<sup>い</sup>います。「私<sup>わたし</sup>はあなたを夫<sup>おつと</sup>に持ちたい、あなたは私<sup>わたし</sup>が嫌い<sup>きら</sup>でなければお互<sup>たがい</sup>に幸福<sup>こうふく</sup>になれます」と云<sup>い</sup>いました。何<sup>なん</sup>と答<sup>こた</sup>えてよいか分<sup>わか</sup>らなかつたが、大層<sup>たいそう</sup>綺麗な女<sup>おんな</sup>だと思<sup>おも</sup>いました。橋<sup>はし</sup>に近<sup>ちか</sup>づくとき女<sup>おんな</sup>はまた私<sup>わたし</sup>の袖<sup>そで</sup>を引<sup>ひ</sup>いて堤<sup>つつみ</sup>を下<sup>お</sup>りて川<sup>かわ</sup>の丁度<sup>ちやうど</sup>ふちまで連<sup>つ</sup>れて行<sup>い</sup>きました。「一緒<sup>いっしょ</sup>にいらっしゃい」そうささやいて川<sup>かわ</sup>の方<sup>ほう</sup>へ私<sup>わたし</sup>を引<sup>ひ</sup>きました。御承知<sup>ごしょうち</sup>の通りあそこは深い所<sup>ところ</sup>です。それで俄<sup>にわか</sup>に女<sup>おんな</sup>がこわくなって引<sup>ひ</sup>きかえそうと致<sup>いた</sup>しました。女<sup>おんな</sup>はにっこりして私<sup>わたし</sup>の手頸<sup>てくび</sup>を握<sup>にぎ</sup>って「私<sup>わたし</sup>と一緒<sup>いっしょ</sup>ならこわくはありません」と云<sup>い</sup>いました。どうしたわけか、その女<sup>おんな</sup>の手<sup>て</sup>にさわられると私<sup>わたし</sup>は赤ん坊<sup>あかぼう</sup>よりも意気<sup>いき</sup>地<sup>ぢ</sup>なくなりまし。夢<sup>ゆめ</sup>の中で走<sup>はし</sup>ろうとしても手<sup>て</sup>も足<sup>あし</sup>も動<sup>うご</sup>かせない時<sup>とき</sup>のような氣<sup>き</sup>が致<sup>いた</sup>しました。女<sup>おんな</sup>は深い水<sup>みず</sup>の中<sup>なか</sup>へ踏<sup>ふ</sup>み込んで、一緒<sup>いっしょ</sup>に私<sup>わたし</sup>を引<sup>ひ</sup>き込みました。それから何も見<sup>み</sup>えも聞<sup>き</sup>えも感<sup>かん</sup>じもしなかつたが、氣<sup>き</sup>がついてみると大層<sup>たいそう</sup>明るい大きな御殿<sup>ごてん</sup>らしい所<sup>ところ</sup>を女<sup>おんな</sup>とならんで歩<sup>ある</sup>いていました。濡<sup>ぬ</sup>れてもいなければ寒<sup>さむ</sup>くもありません。周囲<sup>しゅうい</sup>のものは一切<sup>いっさい</sup>乾<sup>かわ</sup>いて暖<sup>あた</sup>かく綺麗<sup>きれい</sup>でした。私<sup>わたし</sup>はどこへどうして來<sup>き</sup>たのだか分<sup>わか</sup>りません。女<sup>おんな</sup>は私<sup>わたし</sup>の手<sup>て</sup>を引<sup>ひ</sup>きながら案内<sup>あんない</sup>して部屋<sup>へや</sup>から部屋<sup>へや</sup>へと通<sup>とお</sup>りぬけて行<sup>い</sup>きました。——その部屋<sup>へや</sup>の数<sup>かず</sup>多い事<sup>こと</sup>は限<sup>かぎ</sup>りがない程<sup>ほど</sup>で、それがみな空<sup>から</sup>でした、しかし非常<sup>ひじょう</sup>に立派<sup>りつぱ</sup>でした。——最後<sup>さいご</sup>に千畳敷<sup>せんじょうじき</sup>の客間<sup>きやくま</sup>に参<sup>まい</sup>りました。向<sup>むこ</sup>うの床<sup>とこ</sup>の間<sup>ま</sup>の前に灯<sup>あかり</sup>がともっていて、宴會<sup>えんかい</sup>のように

座布団が並べてあったが、客は見えない。女は私を床の間の上座に案内して、自分はその前に坐って云いました、「これが私の家です、ここで私と幸福に暮らされると思いませんか」こう尋ねながらにっこりしました。私はこのにっこりが全世界の何よりも綺麗だと思いました。それで心から「ええ……」と答えました。同時に私は浦島の話を思い出してこれは神女かも知れないと思いましたが、こわくて何も聞かれませんでした。……やがて女中達が入って来て、酒肴を私共の前に置きました。それから私の前に坐った女は、「私がおいやではないなら、今晚婚禮の式を挙げましょう、これが結婚の御馳走です」と云いました。七生までの誓をして、宴会の後、用意の部屋へ案内されました。

### 忠五郎

『私を起してくれたのは朝まだ早い頃でした、その時女は「あなたはもう私の夫です。しかし今私から云われない、あなたも聞いてはならない理由があつて、この結婚を秘密にしておく事が必要です。夜明まであなたをここに置いてはふたり二人とも生命が危くなりましょう。それで御願ですから、御主人の屋敷へあなたを送りかえしても機嫌を悪くしないで下さい。今夜また、それから、これからも毎晩、始めてお遇いしたあの時刻にお出でになって下さい。いつでも橋のわきで私を待っていて下さい、長くはお待たせしませんから、しかし何よりもよく覚えていて下さい、この結婚は秘密ですよ、それからもしこの事を人に話したら、もう

永久えいきゆうに別わかれなければならなくなりますよ」

忠五郎

『私わたしは何事なにごとも女おんなの云いう通りとおにする約束やくそくをしました——浦島うらしまの運命うんめいを想おもい出だしながら、——それから女おんなは誰だれもいない綺麗な部屋へやを沢山たくさん通りぬけて、入口いりぐちまで私わたしを案内あんないしました。そこで私わたしの手頸てくびを取とると、また一切いっさいのものが不意ふいに暗くらくなって覚えおぼえがなくなつたが、気きが付つくと中なかの橋はしの近ちかくの川岸かわぎしに独ひとりで立たっていました。屋敷やしきへ帰かえりましたが、まだ寺てらの鐘かねが鳴なり出だしませんでした。

忠五郎

『夕方ゆうがた 女おんなの云いった時刻じこくにまた橋はしのところへ参まゐりますと女おんなが待まっていました。前まえのように私わたしを深ふかい水みづの中なかへ、それから婚こん礼れいの晚ばんをすごした不思議ふしぎな所ところへ連つれて行いきました。それから毎まい晩ばん、同おなじ様ようにその女おんなと会あつては別わかれました。今晚こんばんも必かならず私わたしを待まっています、女おんなに失しつ望ぼうさせるよりは一層いっそう死しにたいのですから私わたしは行いかねばなりません。……しかし御願おねがいです、私わたしが今いま申まう上げた事ことは誰だれにも決けつして云いわないで下ください』

◆話を終えた忠五郎を、年寄りの足軽が憐れむ。  
◆ナレーター、忠五郎、年寄

年寄の足軽は この話を聞いて驚きかつ恐れた。忠五郎は偽のない白状をしていると感じたが、その白状は不快な事を色々思わせた。あるいはこの経験は迷いかも知れない、禍心を有せる魔の力が起させる迷いかも知れない。しかしもし本当に魅かれていたのなら、この若者は叱るよりむしろ憐むべきものであった。それで無理に干渉がましき事をすれば却って害になると老人は思った。そこで足軽はやさしく答えた。

年寄 『誰にも決して云わない、———少くとも君が達者で生きていくうちには。それでは行ってその女に会い給え、しかし———用心し給え。君は何か悪いものに魅かれてはいないかと心配しているんだ』

忠五郎は 老人の忠告を聞いて微笑して、急いで去った。数時間の後、妙に落胆した様子をして屋敷へ帰った。

年寄 『会ったかね』

と老同僚は ささやいた。

忠五郎 『いいえ』

忠五郎は答えた。

忠五郎 『いませんでした。始めてそこにいませんでした。もう再び私には 会いますまい。あなたにお話したのは 私の誤りでした、———約束を破ったのは この上もない愚な事でした……』

相手は慰めようとしたが駄目であった。忠五郎は倒れて、もう物を  
云わない。悪寒のように、彼は頭から足までふるい出した。

## 三場

◆忠五郎を診た医者が、女の正体に気づく。  
◆ナレーター、年寄、医師

あかつき 暁を知らせる寺の鐘が 鳴り出した時、忠五郎は 起き上ろうとしたが、生気もなく倒れた。たしかに病氣——助からぬ病氣になった。漢方医が招かれた。

医師 『はて、この人には血がない』

とその医師は丁寧ていねいに診察しんさつしてから云った。

医師 『この人の脈管みゃつかんには 水ばかりしかない。これは むつかしい病人だ。……まあ、なんと云う因業いんごうな事だろう』

忠五郎ちゅうごろうの生命いのちを助けるために できるだけの事は なされた——しかし駄目だめであった。日暮ひぐれに彼は死んだ。それから彼の老同僚ろうどうりょうはその初めからの話はなしをした。

医師 『ああ、私もそれを疑うたがってみる処ところであった』

医師は叫んだ。……

医師 『どんな力ちからもそれなら助けることはできない。その女おんなに生命いのちを取られたのはこの人が始めてではない』

年寄 『誰だれですか、その女おんなは、——それとも何なんですか、その女おんなと云うのは』足軽あしがるは尋ねた、——

年寄 『狐きつねですか』

医師 『いいや、昔むかしからこの川かわに出ているのです。若い人わかひとの血ちが好きなのです……』

年寄 『蛇へびですか、——龍りゅうですか』

医師 『いや、いや、君が昼、あの橋の下で見たら 実にいやな動物に

見えるでしょうが』

年寄 『と云うと、どんな動物なんでしょう』

医師 『ただの暮さ、——大きな醜い暮さ』

〈完〉

原案

『ぶんげい文芸倶楽部』だいなな第七  
だいじゅういちごう第十一号

「がま蝦蟇の怪」かい

井關唾鶯

元治年間げんじねんかんの頃ころ、江戸小石川中の橋辺はしべの旗本はたもと 鈴木某すずきなにかしの足軽あしがるに、忠五郎ちゅうごろうなるものありて、年齒二十才余ねんしにじっさいあまりなるが、毎夜まいよ 亥刻頃よつごろより家を出いえで、丑満過うしみつすぎに帰かえり来きたること半年許はんとしばかり、暴風洪雨ぼうふうこううといへども行かざりしことなし。

同僚大どうりょうおおに怪あやしみて 詰問きつもんすれど、深く秘ひかして実じつを告げず。猶月なかつきを追おて止やまざりしかば、再三さいさん 尋ぬるに、更さらに言いふことなし、同僚どうりょうの男おとこ大おおに怒いかり、

「さらば此事このこと 主君しゅくんに密告みつこくして、汝なんじが夜遊やゆうの放蕩ほうとう 嚴禁げんきんせしめん」

と威嚇おびしたりければ、忠五郎ちゅうごろう 大おおに困こうじ、

「さらば、おん身みは年来別としろわて親交したしみあれば、必ず秘ひして他人たにんへ洩もらし玉たまふまじ、吾わが連夜れんや出行いでゆく事こと 外ほかならず、過般いつざやふ不凶とえど江戸川畔がわほとりを深夜しんや通行つうこうせしに切しきりに、吾わが名なを呼よぶ者ものあり、吾われは奇くしき事ことに思おもひ声こえする方かたを看みれば、其年そのとし廿歳はたちなる容貌ようぼう嬋妍せんけんたる婦女ふじよ、側かたへに来きたり我袖わがそでを控ひかへて俱ともに行ゆかんことを進すすむるに、我われは心思しんし恍惚こうこつ、引ひかるる儘ままに行ゆく程ほどに、川岸かわぎしに至いたりて女おんなは堅かたく我わが手てを握にぎりて、共ともに水中すいちゆうに投とうぜんとするにぞ、太いたく愕おどろきて逃にげ出いださんとせしに、彼かの婦おんなは打笑うちわらひつ、

「さのみ心こころを勞ろうし玉たまふな、只妾ただわらわの意いに任まかし玉たまひね」

とて、我われを伴ともなひて深淵しんえんに入りしと思おもふに、茫然ぼうぜんとして夢ゆめの如ごとくなりき。然しかるに程ほどなく彼かの女おんなの家宅いえに到いたり見るに、其華麗そのかれいなる事ことむかしうらしまし往古浦島子むかしうらしましの行ゆきたりしと聞きく、龍宮城りゅうぐうじょうにてもあらずや なぞと想おもはれ、彼女かのおんなこそ乙姫おとひめにてありしならんと思おもはれ、歡喜かんき限りなく遂ついに偕老かいろうの契ちぎりを結むすびける。稍ややありて彼女かのじよの云いふ、

「最早もはや 曉あかつきに近ちかきたれば、疾とく帰かえり玉たまへ、昼ひるは凡人ほんじんの居いる可べき所ところに非あらず」

とて、黄金こがね一枚いちまいを与あたへ

「今夜の事 必ず人に語り玉ふな」

とて、暫時 手を採り送らる、と思へば、いつしか江戸川の岸辺に出で、彼の女の影だもなし。我は奇怪の事には思へど、其夜の娯楽寸時も忘れ難く、翌夜も又彼の川岸に至るに、婦女出迎へて導く事前夜の如く、別に臨めば、黄金一枚を与へられつ、其愉快の喩んようなきに昨夜まで一夜たりとも行かざる事なし」

と語るを聞いて、朋輩の男、愕きて、胸中に思ふやう、

「こは正しく、水中に怪異ありて、此の男を誑かすならん」

と推量し、種々、諷諫して戒めしが、忠五郎 更に聞かず、其夜も亦、例の如く出行しが、程なく不快の面色にて帰り来りければ、朋輩 傍より

「今夜は常よりも帰りの速かりし。如何なる結果にてありしや」

と問ふに、忠五郎、悄然として云ふ、

「本夜は例に替りて、女の迎ふる事なければ、空しく帰り来れり」

と答へて、聽て寢床に入りたりしが、翌日より、忠五郎 心地悩ましく、日を経るに及び身体憔悴し、咳嗽頻りに発し、漸次 心神 衰弱せるに、医師を招きて診察治療を乞ひたりしも、医師も其病体を窺ひて大に驚き、

「是、普通の病症に非ず。恐らくは、妖魅の為に精血を吸はれしならんと察すれど、愚老の管見奈何あらん」

と聞て、忠五郎 其適言に愕き、有の儘に告たれば、医師も

「ヤ、ヤ、ヤ」

と首肯しつつ、

「今少し早かりせば、施術の法もある可きも、斯くなりては治するの

望のぞみなし」

とて、一二配いちにはいざい剤ざいして与あたへけるが、功こうげん験げんなくて、程ほどなく天ようせつ折せつしけるとぞ。  
往むかし時し、寛かんせい政せいの頃ころにも、かかると語はなしのありて、此このかわ川かわには年としを經へし蟾がま蜩たぬの  
怪かいの棲すむよし、古こらい来らいより云い伝つたふる所ところなりとかや。

〈完〉

The Story of Chūgorō  
Lafcadio Hearn

Along time ago there lived, in the Koishi-kawa quarter of Yedo, a hatamoto named Suzuki, whose yashiki was situated on the bank of the Yedogawa, not far from the bridge called Naka-no-hashī. And among the retainers of this Suzuki there was an *ashigaru*<sup>1</sup> named Chūgorō. Chūgorō was a handsome lad, very amiable and clever, and much liked by his comrades.

For several years Chūgorō remained in the service of Suzuki, conducting himself so well that no fault was found with him. But at last the other ashigaru discovered that Chūgorō was in the habit of leaving the yashiki every night, by way of the garden, and staying out until a little before dawn. At first they said nothing to him about this strange behaviour; for his absences did not interfere with any regular duty, and were supposed to be caused by some love-affair. But after a time he began to look pale and weak; and his comrades, suspecting some serious folly, decided to interfere. Therefore, one evening, just as he was about to steal away from the house, an elderly retainer

called him aside, and said:—

"Chūgorō, my lad, we know that you go out every night and stay away until early morning; and we have observed that you are looking unwell. We fear that you are keeping bad company, and injuring your health. And unless you can give a good reason for your conduct, we shall think that it is our duty to report this matter to the Chief Officer. In any case, since we are your comrades and friends, it is but right that we should know why you go out at night, contrary to the custom of this house."

Chūgorō appeared to be very much embarrassed and alarmed by these words. But after a short silence he passed into the garden, followed by his comrade. When the two found themselves well out of hearing of the rest, Chūgorō stopped, and said:—

"I will now tell you everything; but I must entreat you to keep my secret. If you repeat what I tell you, some great misfortune may befall me.

"It was in the early part of last spring—about five

---

<sup>1</sup> The ashigaru were the lowest class of retainers in military service.

months ago—that I first began to go out at night, on account of a love-affair. One evening, when I was returning to the yashiki after a visit to my parents, I saw a woman standing by the riverside, not far from the main gateway. She was dressed like a person of high rank; and I thought it strange that a woman so finely dressed should be standing there alone at such an hour. But I did not think that I had any right to question her; and I was about to pass her by, without speaking, when she stepped forward and pulled me by the sleeve. Then I saw that she was very young and handsome. 'Will you not walk with me as far as the bridge?' she said; 'I have something to tell you.' Her voice was very soft and pleasant; and she smiled as she spoke; and her smile was hard to resist. So I walked with her toward the bridge; and on the way she told me that she had often seen me going in and out of the yashiki, and had taken a fancy to me. 'I wish to have you for my husband,' she said;—'if you can like me, we shall be able to make each other very happy.' I did not know how to answer her; but I thought her very charming. As we neared the bridge, she pulled my sleeve again, and led me down the bank to the

very edge of the river. 'Come in with me,' she whispered, and pulled me toward the water. It is deep there, as you know; and I became all at once afraid of her, and tried to turn back. She smiled, and caught me by the wrist, and said, 'Oh, you must never be afraid with me!' And, somehow, at the touch of her hand, I became more helpless than a child. I felt like a person in a dream who tries to run, and cannot move hand or foot. Into the deep water she stepped, and drew me with her; and I neither saw nor heard nor felt anything more until I found myself walking beside her through what seemed to be a great palace, full of light. I was neither wet nor cold: everything around me was dry and warm and beautiful. I could not understand where I was, nor how I had come there. The woman led me by the hand: we passed through room after room,—through ever so many rooms, all empty, but very fine,—until we entered into a guest-room of a thousand mats. Before a great alcove, at the farther end, lights were burning, and cushions laid as for a feast; but I saw no guests. She led me to the place of honour, by the alcove, and seated herself in front of me, and said: 'This is my home: do you think that you could be

happy with me here?' As she asked the question she smiled; and I thought that her smile was more beautiful than anything else in the world; and out of my heart I answered, 'Yes....' In the same moment I remembered the story of Urashima; and I imagined that she might be the daughter of a god; but I feared to ask her any questions.... Presently maid-servants came in, bearing rice-wine and many dishes, which they set before us. Then she who sat before me said: 'To-night shall be our bridal night, because you like me; and this is our wedding-feast.' We pledged ourselves to each other for the time of seven existences; and after the banquet we were conducted to a bridal chamber, which had been prepared for us.

"It was yet early in the morning when she awoke me, and said: 'My dear one, you are now indeed my husband. But for reasons which I cannot tell you, and which you must not ask, it is necessary that our marriage remain secret. To keep you here until daybreak would cost both of us our lives. Therefore do not, I beg of you, feel displeased because I must now send you back to the house of your lord. You can come to me to-night again, and every

night hereafter, at the same hour that we first met. Wait always for me by the bridge; and you will not have to wait long. But remember, above all things, that our marriage must be a secret, and that, if you talk about it, we shall probably be separated forever.'

"I promised to obey her in all things,—remembering the fate of Urashima,—and she conducted me through many rooms, all empty and beautiful, to the entrance. There she again took me by the wrist, and everything suddenly became dark, and I knew nothing more until I found myself standing alone on the river bank, close to the Naka-no-hashii. When I got back to the yashiki, the temple bells had not yet begun to ring.

"In the evening I went again to the bridge, at the hour she had named, and I found her waiting for me. She took me with her, as before, into the deep water, and into the wonderful place where we had passed our bridal night. And every night, since then, I have met and parted from her in the same way. To-night she will certainly be waiting for me, and I would rather die than disappoint her: therefore I must go.... But let me again entreat you, my

friend, never to speak to any one about what I have told you."

\*

The elder ashigaru was surprised and alarmed by this story. He felt that Chūgorō had told him the truth; and the truth suggested unpleasant possibilities. Probably the whole experience was an illusion, and an illusion produced by some evil power for a malevolent end. Nevertheless, if really bewitched, the lad was rather to be pitied than blamed; and any forcible interference would be likely to result in mischief. So the ashigaru answered kindly:—

"I shall never speak of what you have told me—never, at least, while you remain alive and well. Go and meet the woman; but—beware of her! I fear that you are being deceived by some wicked spirit."

Chūgorō only smiled at the old man's warning, and hastened away. Several hours later he reentered the yashiki, with a strangely dejected look. "Did you meet her?" whispered his comrade. "No," replied Chūgorō; "she was not there. For the first time, she was not there. I think that she will never meet me again. I did wrong to tell

you;—I was very foolish to break my promise...." The other vainly tried to console him. Chūgorō lay down, and spoke no word more. He was trembling from head to foot, as if he had caught a chill.

\*

When the temple bells announced the hour of dawn, Chūgorō tried to get up, and fell back senseless. He was evidently sick,—deathly sick. A Chinese physician was summoned.

"Why, the man has no blood!" exclaimed the doctor, after a careful examination;—"there is nothing but water in his veins! It will be very difficult to save him.... What maleficence is this?"

\*

Everything was done that could be done to save Chūgorō's life—but in vain. He died as the sun went down. Then his comrade related the whole story.

"Ah! I might have suspected as much!" exclaimed the doctor.... "No power could have saved him. He was not the first whom she destroyed."

"Who is she?—or what is she?" the ashigaru

asked,—“a Fox-Woman?”

“No; she has been haunting this river from ancient time. She loves the blood of the young....”

“A Serpent-Woman?—A Dragon-Woman?”

“No, no! If you were to see her under that bridge by daylight, she would appear to you a very loathsome creature.”

“But what kind of a creature?”

“Simply a Frog,—a great and ugly Frog!”.

## 原案

鬼談』井關唾鶯『文芸倶楽部』第七 第十一号「蝦蟇の怪」

底 本 小泉八雲著・平川祐弘編『怪談・奇談』〈講談社学術文庫、1990年〉

## 参考資料

- ・「小泉八雲 忠五郎のはなし（田部隆次譯）附・原拠／「古い物語」～了」Web サイト『Blog 鬼火～日々の迷走』〈2025年3月24日更新〉

[https://onibi.cocolog-nifty.com/alain\\_leroy\\_/2019/09/post-5b7744.html](https://onibi.cocolog-nifty.com/alain_leroy_/2019/09/post-5b7744.html)

底本を元に、参照資料を用いながら、現代仮名づかひの読み下し文に書き換えました。

原文からの変更点は以下のとおりです。

1. 旧字を新字に書き換えました。
2. 一部、ひらがなを漢字に、漢字をひらがなに開きました。
3. 句読点の変更、また一部に空白を入れ、分かち書きにしました。
4. ふりがなを、ののラジオの解釈のもと、加えました。

## 英語原文

Project Gutenberg

[https://www.gutenberg.org/cache/epub/55473/pg55473-images.html#The\\_Story\\_of\\_Chugoro](https://www.gutenberg.org/cache/epub/55473/pg55473-images.html#The_Story_of_Chugoro)

Title: Kotto: Being Japanese Curios, with Sundry Cobwebs

Author: Lafcadio Hearn

Illustrator: Genjiro Yeto

Release date: September 1, 2017 [eBook #55473]

Most recently updated: October 23, 2024

Language: English

Credits: Produced by Marc D'Hooghe at Free Literature (online soon in an extended version, also linking to free sources foreducation worldwide ... MOOC's, educational materials,...)

Images generously made available by the Internet Archive.)

## Podcast ののラジオ 好評配信中！



視聴・購読はこちらから  
<https://gekidannono.com>

ご意見・ご感想はこちらへ  
[radio@gekidannono.com](mailto:radio@gekidannono.com)

劇団ののでは、名作文学を声に出して演技し、収録した音声を Web 上で配信しています。複数名で読むラジオドラマタイプ、単独で読む朗読タイプなど、様々な形で朗読をしています。

みなさんも一緒に朗読を体験して楽しんでいただけるよう、本文に出てくる言葉や物語の解説も、公式サイト上で公開しています。

いつか国語の教科書で読んだ気がする、芥川龍之介・宮沢賢治・夢野久作などのあの作品やこの作品、ぜひ、役者の声でお楽しみください。

## 劇団ののと読む名作文学 小泉八雲作・田部隆次訳 『忠五郎のはなし THE STORY OF CHUGORO』 Podcast 版

発行日 令和 8 年 3 月 7 日

著 者 小泉八雲作・田部隆次訳

編 集 劇団のの

発 行 劇団のの

[https://gekidannono.com/  
radio@gekidannono.com](https://gekidannono.com/radio@gekidannono.com)

※本文は、青空文庫様掲載の原文を加工したものです。

ゴシック体のルビは、原文に振られていたものです。

底 本 『小泉八雲全集第八巻 家庭版』第一書房（1937）

初 出 明治 37(1904)年

図書カード URL

<https://www.aozora.gr.jp/cards/000258/card59430.html>

